

複層化した近代文学の「規範」

——講談社「少年少女日本文学館」の企て——

佐藤 宗子
千葉大学・教育学部

The Ambiguous Canon of Modern Japanese Literature:
The Case of Kodan-sha's 'Library for Boys and Girls'

SATO Motoko
Faculty of Education, Chiba University, Japan

一九六〇年代刊行の少年少女近代文学叢書は、当初の作家中心の巻構成・国語教育との親和性が強い傾向から、(長編)作品中心の巻構成・課外の教養形成としての読書といった傾向への変遷が伺えた。それに対し一九八五年に刊行開始された講談社「少年少女日本文学館」は、印刷技術の進展の中で傍注を施すなど新たな工夫も見せつつ、とくに巻構成において特徴がみられる。表題など外側から窺えるのは従来の「規範」に近い「近代文学」の様相でありながら、実際に収録された作品の作家数はその六割増しに上る。また収録作家は生年を考慮するなど、ジャンルというよりは時代の流れを意識した括られ方をしている。その意味では八〇年代までの研究成果を活かしたものと言えるが、その一方、表面にはそれが現れないままであり、近代文学の「規範」がいわば複層化している。今世紀に再編集版が出ていることも含め、「文学」の現在の問題として考慮すべきことである。

キーワード……児童文学 (children's literature) 叢書 (collection) 少年少女 (boys and girls) 近代文学 (modern literature) 規範 (canon)

一

「現代児童文学」の出発期から発展期にあたる一九五〇年代から六〇年代に刊行開始されたいくつかの少年少女向け叢書において、「日本近代文学」の「規範」の確立がみられることは、近年の追究により明らかにしてきた。(『千葉大学教育学部研究紀要』第六五巻、六六巻一号、同巻二号、六七巻所収の小論を参照されたい。) その際、作家中心の巻構成・国語教育との親和性が強い傾向から、(長編)作品中心の巻構成・課外の教養形成としての読書といった傾向への変遷も伺えた。では「現代児童文学」の転換期と言える一九八〇年代には、果たしてどのような「近代文学」

の叢書が登場したのであろうか。

本稿で取り上げるのは、「少年少女日本文学館」(講談社)である。一九八五年に刊行開始され、当初は二四巻、後に六巻が追加され、八八年までに合計三〇巻となった同叢書は、日本の「近代文学」を、いかなる編集方針のもとに「少年少女」読者に提示しようとしているのだろうか。造本を含めた編集・刊行の状況と叢書収録の書目をあわせて概観する中から、その特徴を浮き彫りにするとともに、同叢書が今世紀に入り「21世紀版 少年少女日本文学館」として若干の変遷を経て再刊されたことも視野に入れつつ、近代文学の「規範」化の内実を考えていくこととしたい。

二

(一)

検証すべき叢書を取り上げるより前に、まずは、一九八〇年代の児童文学状況や関連する考えられる文学・文化状況について、確認しておこう。

一九七八年および八〇年を、「現代児童文学」の転換の時期とみなすのは、たとえば石井直人「現代児童文学の条件」(日本児童文学学会編『日本の児童文学4 現代児童文学の可能性』、東京書籍、一九九八年)を参照してもわかるように、すでに共通認識になっていると考えてよからう。たとえば『日本児童文学』七八年五月号の「タブーの崩壊」特集、八〇年のアリエス『子供』の誕生』の邦訳刊行を挙げておく。同時期はまた、児童書出版事情に変化が生じた時期でもあった。いわゆる幼年童話が、八〇ページ前後かつカラー挿絵が相当量掲載された一話一冊のスタイルになったり、科学絵本を中心に写真絵本が増加したりした。八〇年に刊行され、その後ブームを巻き起こした矢玉四郎『はれときどきぶた』(岩崎書店)も、主人公が作中で鉛筆で日記を書いたのちに消しゴムで消した文字のかすれ具合が、絵で示された箇所などは、その時期になって可能になった印刷技術によるものだったと伝えられている。こうした印刷のデジタル化進行に伴った変化は、それなりに児童書出版全体の編集にも影響を及ぼしたと考えられる。

印刷技術の進展はまた、一般向け書物でも新たなスタイルの叢書を生んだ。一九七六年刊行開始の「新潮日本古典集成」は、古典の本文のすぐわきにセピア色で現代語訳が注としてつく四六判という斬新なもので、従来の「日本古典文学大系」(岩波書店)や「日本古典文学全集」(小学館)の重厚で地味な版面とは大いに異なるイメージを与えた。

文学や文化の内容面でいえば、児童文学のみならず、一般の文学・文化に関して、同時期がある種の転換点であったという指摘は、南信長『1979年の奇跡——ガンダム・YMO・村上春樹』(文春新書、二〇一九)などでなされている。

そうした八〇年代に、講談社は、装幀などで共通性のある複数の「少年少女」向け叢書を刊行していった。次に、それらを概括してみることにしたい。

(二)

講談社から一九八〇年代以降に刊行された「少年少女」を冠する文学叢書は、四つある。「少年少女日本文学館」(当初二四巻+六巻=三〇巻、八五〜八八年)、「少年少女世界文学館」(二四巻、八六〜八九年)、「少年少女伝記文学館」(二四巻、八七〜九一年)、「少年少女古典文学館」(企画は二六巻、刊行は二五巻、九一〜九五)である。このうち、「少年少女古典文学館」の巻数について触れておくと、本来は井上ひさしによる現代語訳の「忠臣蔵」が第一九巻となるべき予定であったが結局刊行されず、その後の増刷の際には当該巻が刊行中止となった旨が巻末の一覧に記載されることとなった。いずれの叢書の巻数も近似しており、またそれぞれは外見がよく似ている。明らかに、関連する叢書として企画されたことは間違いない。

四つの叢書のうち、最初に刊行されたのが、「少年少女日本文学館」である。以下に、凡例に相当するものを示す。

◆ この本の本文表記について

- 現代かなづかい、現代送りがないを使用した。
- 極端な充て字と思われるもの、また代名詞・副詞・接続詞などのうち原文を損うおそれが少ないと思われるものをかなにあらためた。
- 本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、小さな字で注を加えた。注と本文ルビが重なる場合はルビをとった。ただし、誤読のおそれのあるものには、左側にルビをそえた。
- さらに説明を必要とする語句や事項には、*をつけイラストやくわしい注をつけ加えた。(引用者注、*は原文では赤色)

凡例全体の書き方からして、ひらがなが多く読みやすさを重視している様子が窺える。また三項では、「新潮日本古典集成」と同様の傍注に言及しているが、実際にセピア色を使用し、レイアウトなども参照したと考えられる。四項ではイラストも含めた頭注などを説明しているが、これも、「日本古典文学全集」などですでに用いられている方法を参照したのだろう。すなわち、一般の読者に「古典文学」がわかりにくくなったため取られた方法が、少年少女読者に「近代文学」がわかりにくくなったために、流用されるに至ったわけである。従来の偕成社やポプラ社の少

年少女向け近代文学叢書でも、わかりにくい語句の意味は本文末に後注のかたちで付けられていた。しかし、いちいちページをひっくり返すことのない、その場で語句を理解しやすいこの新しい方法の選択は、とりつきにくい内容であればこそ求められるものであった。要するに、年少女読者にとって、古典文学は言うに及ばず、日本の近代文学もまた、なじみの薄いものとなってしまうのだった。

とはいえ、こうした手厚い編集方針が功を奏してか、本叢書は当初予定から増巻し、結局三〇巻を刊行することになった。また、二〇〇九年にはこのうち二〇巻を、多少の内容修正と装幀の変更を施して、「21世紀版 少年少女日本文学館」として刊行している。ちなみに、「少年少女古典文学館」と「少年少女世界文学館」は、八〇年代の刊行冊数と変わらぬ巻数で、二〇〇九年、二〇一〇年からそれぞれ翌年にかけて、同様に「21世紀版」と銘打ち、刊行されている。伝記ジャンルが外れたのは、この二十年の間に、それが広くノンフィクションの中に包含されたと考えるのが妥当であろうか。これら関連叢書の検討については、別の機会を待ちたい。さて、一九八〇年は、「近代文学」というより「現代文学」の時代である。たとえば七六年に『限りなく透明に近いブルー』（講談社）でデビューした村上龍が『コインロッカー・ベイビーズ』（同）を刊行し、七九年に『風の歌を聴け』（同）でデビューした村上春樹が『1973年のピンボール』（同）を刊行した年であるといえ、より明らかであろう。そんな時代において、どのような作品が、どのようなかたちで、年少少女たちに手渡されようとしていたのか。叢書の「外見」と「内実」をみていくことにしよう。

三

「少年少女日本文学館」の巻末には、次のような記載がある。

編集企画——日本芸術院会員 井上 靖／日本近代文学館理事長 小田切 進
編集協力——日本近代文学館

なお、第二三巻と二四巻の「現代児童文学傑作選」については佐藤さると古田足日が、また三〇巻については井出孫六が収録作品の選者であることが明記されている。また、多くの巻では、本文注釈として小田切進の名が記載されている。

つまり、以下のように言うことができるだろう——この叢書は、実質的には、小田切進が、理事長を務める日本近代文学館のスタッフや資料なども活用しながら、児童文学やノンフィクションなど特定のジャンルを除き、近代文学から現代文学まで全体の構成に目配りをしたものだ、と。もちろん、商業出版であるため、発行元の要請を受け入れた部分はあるだろうが、各巻の収録作品や配列などは、基本的に小田切の考えによるものとみなせるのではないか。

全体として、明治期の早い段階の作品から時代を下っていくのは、従来の作家中心の叢書と同様であるが、基本的に二作家による二作品を表題に掲げているのは、一つの特徴と言えるだろう。表題が二作品のみなのは、基本的には長編の作品だが、実際にも一作品収録のみなのは第一六、一八巻と増巻後の第二五―二八巻であり、第二、一〇、一三巻には同著者による短編が併載されている。

二作家の二作品が表題となっている場合、それらの作家の他の作品も収録されているのは、容易に想像される。だが、実はこの叢書の場合、「表題には見えていない作家」の作品が収録されている巻が、多いのである。それも、「中トビラ」には、名前が掲載されている作家」もいるが、「目次で初めて収録がわかる作家」も存在する。以下、本稿末の一覧を適宜参照されたい。「著者」名の欄で何も印がないのが表題に記載された作家であるが、下線を引いたのが前者の「中トビラ」組であり、マルカッコで示したのが後者の「目次」組である。これらのいわば「見えにくい」作家たちの収録作品の詳細についてはすべてを紹介することは控えるが、次の節で、特に目立つ点を指摘することにした。

全体の巻構成でいうと、前述のように明治期から時代を下るかたちになっているが、さらに番号の若い巻で詩歌を取り上げていること、児童文学の作品がある程度固めて入れていること、とくに現代児童文学については二巻の短編アンソロジーとして入ること、表題からは第二二、二三巻で一九七〇年代から八〇年代初頭までの作品収録が示されていることなどがわかる。また、後続の六巻については、長編を主体にしており、従来の年少女向け近代文学叢書でおなじみであった下村湖人と夏目漱石に加え、戦後の三島由紀夫を選択したこと、ノンフィクションをジャンルとして取り入れたことが特徴として指摘できるだろう。さらに、作品傾向としていえば、小川未明や宮沢賢治の作品群を除けば、概して日常的な作品が収録対象として選ばれているように思われる。ただ、考えてみれば従来の叢書も、たとえば泉鏡

花といった幻想文学の作家は対象にしてこなかった経緯がある。少年少女向けの教養形成を念頭に置いた場合、そうしたジャンルはとくに、「規範」から外れるものという捉え方が根強く存したといつてよからう。

各巻には、収録作家に関わるグラビア、解説、随筆、略年譜、収録作品の底本の明記が含まれる。解説・随筆の執筆者は、一覧に載せた。解説は基本的に近代文学研究者や文芸評論家が担当しているが、従来の叢書と異なり、巻ごとに執筆者が選ばれており、後続の「吾輩は猫である」で小田切進が、「潮騒」で三好行雄が二回目の担当をしている以外、複数巻担当者はいない。随筆のほうは、かなり幅広く作家や詩人、評論家などが担当しており、文体もかなり多様である。なお、各巻には八ページだけの「読書指導のしおり」という別刷が挟み込まれており、そちらは日本文学教育連盟の常任委員が執筆をしている。ただし、本体からは切り離された冊子であるため、本体のみに接するならば、国語教育との関連は全く感じられない、と言つてよい。作家中心の巻の割り振りでありつつも、かつてのあかね書房や偕成社の作家名明記の叢書とは異なり、課外の気ままな読書に向くような造りとなっている。

そのような中で、叢書全体としての一貫した編集の傾向があるとすれば、作家たちをいかにグループ化するかという点の意識が明確に窺えるという点だろう。そしてそこに、「表題には見えていない作家」の作品収録も、関係していると考えられる。次に、それらの作家たちについて確認した後、編集傾向に話をすすめることにしたい。

四

全体で三〇巻ではあるものの、後続の巻は長編が多いこともあり、当面は第二四巻までを中心に検討を進めていくことにしよう。詩歌と現代児童文学のアンソロジー三巻を除いた計二一巻で、表題に示された作家は全部で三四人である。その一方、先の略記でいうなら「中トビラ」組は七巻にわたり八人、「目次」組は六巻にわたり十九人を数える。つまり、表紙を見ただけでは収録されているとはわからない作家が、収録作家全体の四割強を占めるのである。このうち、第一、三、四、五、九巻については、中トビラ組がそれぞれ一人であり、表紙には全員を記載する余裕がなかったため、ということと了解されるだろう。以下、それ以外の場合を三つのパ

ターンに分けて、状況を示してみたい。

第七巻収録の作家は、表題明記「山本有三、中トビラ」菊池寛、目次「宇野浩二、豊島与志雄となっている。このうち表題の作品名は山本の「ウミヒコヤマヒコ」のみだが、実収録は山本「兄弟」「ウミヒコヤマヒコ」「こぶ」、菊池「納豆合戦」「三人兄弟」「身投げ救助業」、宇野「春を告げる鳥」「海の夢山の夢」「王様の嘆き」、豊島「天狗笑い」「天下一の馬」であり、作品数でも収録作の知名度でも、とくに山本が突出していると言ひ難い。『路傍の石』や『真実一路』を再録しないのは、それらが古い「成長小説」であるという判断があったためと考えられる。それにも関わらず、従来なじみの薄い作品を選択しつつ山本のみを表紙掲載作家とした理由は何であつたのだろうか。ちなみに、「解説」で竹盛天雄は「明治二十年代の初めに生まれ、(略)大正期の比較的自由でのびのびした時期に、作家として世に出た人たち」と四人を総括する。宇野以外は「新思潮」のメンバーである一方、菊池・宇野・豊島は『赤い鳥』に縁があつた作家たちでもある。

第一四巻は、かつての童話作家の大家三人がそろい踏みをした巻である。ただし、表題は小川未明「赤いろうそくと人魚」のみである。実収録は小川「赤いろうそくと人魚」「月夜と眼鏡」「金の輪」「野ばら」「青空の下原っぱ」「雪くる前の高原の話」、坪田「魔法」「きつねとぶどう」「正太樹をめぐる」「善太と汽車」「狐狩り」、浜田「泣いた赤おに」「ある島のきつね」「むく鳥のゆめ」「花びらのたび」「りゅうの目のなみだ」と、収録作品数もほぼ等しい。この場合は、表題にどうしても「赤いろうそくと人魚」を入れる意思が強く働いたということだろうか。「解説」の紅野敏郎は、「早稲田の文学部に関係の深い三人の文学者」と括っている。また、浜田は別として、未明と譲治は「児童文学者という感じは私たちにはなく、まぎれもなく近代の文学者というイメージの方が強い」と述べる。ただし、「随筆」のほうでは山室静が「児童文学の御三家」と題して執筆しており、「解説」と「随筆」で見解が異なる様を呈している。

そして、第一七巻、第一九～二二巻の場合。いずれも表題作家二人と、あとは「目次」組である。まずは、各巻の収録状況を列挙する。

第一七巻：山本「ちいさこべ」、尾崎「虫のいろいろ」、円地「噴水(抄)」、中島「山月記」、木山「尋三の春」、永井「黒い御飯」「胡桃割り」とこや

のいす」、原「夏の花」

第一九卷…大岡「母」「母六夜」「焚火」「童謡」、梅崎「ヒョウタン」「クマゼミとタマゴ」、伊藤「風」、中野「おじさんの話」、佐多「キヤラメル工場から」「橋にかかる夢」「水」

第二〇卷…安岡「宿題」「サアカスの馬」、吉行「悪い夏」「童謡」、遠藤「最後の殉教者」、阿川「鱧とおこぜ」、小川「人隠し」、北「天井裏の子供たち」
第二二卷…水上「秋末の一日」「母一夜」「雪三景」、曾野「落葉の声」、辻「吝い」、竹西「神馬」、開高「裸の王様」

第二三卷…井上「汚点」、野坂「小さい潜水艦に恋をしたでかすぎるクジラの話」「風になったお母さん」、三浦「春は夜汽車の窓から」「初秋」「メリー・ゴー・ラウンド」、村上「貧乏な叔母さんの話」「踊る小人」

こうしてみると、かなり多様な採録のしかたをしていることがわかる。第一七巻のように山本周五郎と中島敦と一緒に入るのみならず、永井龍男や原民喜まで収録されている。全体的に、一作家一作品のみの収録も目立つ。第二二巻では、村上春樹が収録されているが、これが一番新しい作品——八〇年代発表の作品——の収録となっている。これらは、どのような括り方と言えるのだろうか。

第一七巻の場合は、収録作家たちの生年が一八九九年から一九〇九年までとなっている。この巻の場合、解説担当の奥野健男も作家ごとに分けて執筆しており、それ以外にはあまり共通点がない。

第一九巻では、磯田光一は、大岡と梅崎を「ともに戦後の文学の流れのなかで、大きな足跡をのこした作家」とし、伊藤・中野・佐多については「昭和初年から文学活動を続けていた」と区分する。作品発表時期もまちまちであり、二グループを合わせた巻と言えるのかもしれない。

第二〇巻では佐伯彰一が六人の名を列挙し、「まことに多彩な、文字通り豪華メンバー」「わが国の現代文学を代表する第一線の作家たち」といいつつ「いずれも一九二〇年代の生まれ」と指摘する。そこには「個性差をこえた共通の時代の匂い」があるともいう。第二二巻では進藤純孝が、収録作家の生年をわざわざ示した上で、「大正時代の中ころから、昭和ひとけた、それも中期までの、十二年の間に生まれた作家」と述べる。そして、太平洋戦争開戦時の年齢を数えてみるよう読者を促す。

第二二巻ではやはり、福田宏年が井上・野坂・三浦の三人について「いわゆる昭和一桁生まれの年代に属す」ことに触れる。

こうしてみてみると、どうやら作家の生年が括り方の一つの指標になっているとは言えそうである。それは、何を意味するだろうか。

これらの「目次」組作家を含む巻が、現代に近い巻に多いことに、注目したい。考えてみれば明治期の夏目漱石や森鷗外などは、すでに定着した評価を得ており、叢書構成に際しても動かしようがない。それに対して、もう少し後の作家たちについて言えばある程度は融通が利く。そして、八〇年代になったからこそ広く概観できる利点もある——ということだろう。第二次大戦後に登場した作家たちはもちろんのこと、戦前から活動をしていた作家についても、六〇年代の基準や価値観とは異なる目を持つてどの作品を採用するかを改めて選ぶ余地がある。また、短編を主体に収録することで、さらには連作の場合に抄録するなどの措置を取ること、より多くの作家の作品を対象にすることが可能となる。

では、そうした多様な作品群を、どのように巻構成としてまとめ上げるのか。それは、社会と作家乃至は作品が、接点を持った時期による括り——ということになるしかなかったのではないか。同時代の空気を共有する作品、同時代の社会状況を生きたという事実。それが、「作家の人生から学ぶ」姿勢を脱した文学研究を活かした、少年少女読者に向けたメッセージになったのではないか。「文学」は「社会」の中で、あるいは「社会」と関わる中で、作品を生み出す。そうした意識を持った時、各巻の収録作品群は仮にゆるい括りであったにせよ、読者にとって一巻を読み通す体験の後に得る、各作品を超えた新たな文学の「読み」の可能性につながっていくだろう。

ただ、それは実際に各巻を手に取り、表題や表紙からは見えなかった作品群と出会った後のことである。この点について、再度考えてみることにしたい。

五

「少年少女日本文学館」は、広告一覧などの表題から見える叢書の在り様と、実際の収録作品状況から見える叢書の在り様が、大きく相違している。それは、これまで検討してきた近代文学叢書とも異なるが、同時に、先に紹介したこの時期の講談社刊行の他の関連叢書とも異なる。たとえば「少年少女世界文学館」の収録作品

は基本的に、長編が多い。短編であつてもたとえばドイル、ポーなど、その作家の表題以外の他の作品群である。「少年少女古典文学館」や「少年少女伝記文学館」の場合は、言わずもがなであろう、表題から逸れる収録がなされるということはない。となるとやはり、「少年少女日本文学館」の特異さが目立つ。

おそらくそこには、出版上の制約もあつただろう。版元としては、表題には知名度の高い作家乃至は作品が明示されてほしい。あるいは、知名度は高くなくとも、対象読者の関心を喚起しうるような魅力的な題名がほしい。他方で、従来にない新鮮さは醸し出したいものの、多くの情報を盛り込みすぎるとは避けたい。……といった要望が出たであろうことは容易に推測される。そのせめぎあいの中で、一覧に示すような表題が確定し、その一方で、「中トビラ」組や「目次」組の作家たちやその作品群が埋め込まれた。つまり、「少年少女日本文学館」は、二つの貌を持つていと言える。表題から見えるのは、多少の現代文学の作家たちも入ってきたものの、アンソロジーを除けばせいぜい三十数人程度の作家の作品が収録された叢書。ただし、実際に繙けば、総勢六十数人の作家たちの、極めて多様な作品が、時代の流れを感じさせるように配置された叢書。表から見れば井上ひさしと三浦哲郎の短編、ところがその実、野坂昭如の『戦争童話集』収録作と村上春樹の初期短編が含まれている……といった具合に。

ここにあるのは、否応のない「規範」の複層化である。世間一般に通用するような定着した「規範」——「現代文学」の多様な成果に目を向けることなく、むしろ後続六巻で補われたようなかつての「定番」長編に安定感を抱くような——が、表題レベルでまぎれもなく存する。そして、その裏側に、第二次大戦後四十年、近代文学・現代文学が何を経てきたかをもとにした「規範」の一つ——そこには小田切進という研究者による個性が反映しているだろう——が、そこから思考や議論が始まる可能性を持つものとして隠れている。

先述のように、この叢書は二〇〇九年に、「21世紀版」を頭に冠して再編集され、現在も流通している。その際、後続六巻以外に、詩歌と現代児童文学のアンソロジーあわせて三巻、そして第七巻が落とされ、全二〇巻に縮小された。(若干の巻では作品が一部落とされたり注が削られたりしているが、ページ調整の関係によるものと思われる。)アンソロジーの三巻は、改めての著作権処理等の問題が壁になったのだろう。キリのいい数字にするために、第七巻は削られたのかと推測する。だが、

新たに企画をたてるといったことは、なされなかった。再編集・再刊は、講談社の叢書の常と言つてもよいのだが、それは同時に、新しく日本の近代文学・現代文学を「規範」化する機会を失つたともみなせる。

二十一世紀も五分の一が過ぎようとする中で、過去のこうした「規範」化の試みを再検証することが、「文学」の現在を認識し直す契機になるのではないだろうか。

※本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「戦後児童文学にみる「文学」の体系化と規範化——少年少女向け叢書を中心に」(課題番号16K02398、平成28年度～31年度)の研究成果の一部をまとめたものである。

※本稿の骨子は、二〇一九年一月二三日(土)に開催された日本児童文学学会第五八回研究大会(於・百合女子大学)の席上における研究発表「複層化した近代文学の「規範」——講談社「少年少女日本文学館」の企て——」の中で発表した。

少年少女日本文学館（講談社） 24巻→30巻、21世紀版（2009年刊）=20巻

編集企画=井上靖／小田切進、編集協力=日本近代文学館 なお23・24巻の選者は佐藤さとる・古田足日、30巻は井出孫六

下線は中トビラに名前あり、カッコは作品収録のみ

21世紀版の巻

巻	配本	刊行日	表題	著者	解説	随筆	
1	15	1986.12.14	たけくらべ・山椒大夫	樋口一葉・森鷗外・ <u>小泉八雲</u>	前田愛	杉本苑子	1
2	1	1985.10.18	坊っちゃん	夏目漱石	江藤淳	三木卓	2
3	16	1987. 1.14	ふるさと・野菊の墓	島崎藤村・ <u>国木田独步</u> ・伊藤左千夫	猪野謙二	黒井千次	3
4	17	1987. 2.14	小さな王国・海神丸	谷崎潤一郎・ <u>鈴木三重吉</u> ・野上弥生子	瀬沼茂樹	河野多恵子	4
5	13	1986.10.18	小僧の神様・一房の葡萄	志賀直哉・ <u>武者小路実篤</u> ・有島武郎	巖谷大四	後藤明生	5
6	3	1985.12.18	トロッコ・鼻	芥川龍之介	三好行雄	井上靖	6
7	21	1987. 6.15	ウミヒコヤマヒコ	山本有三・ <u>菊池寛</u> ・(宇野浩二)・(豊島与志雄)	竹盛天雄	高井有一	
8	24	1987. 9.21	明治・大正・昭和詩歌選	大岡信 編	浅井清	山本健吉	
9	12	1986. 9.25	幼年時代・風立ちぬ	室生犀星・ <u>佐藤春夫</u> ・堀辰雄	久保忠夫	萩原葉子	7
10	2	1985.11.27	銀河鉄道の夜	宮沢賢治	中村稔	矢川澄子	8
11	8	1986. 5.22	伊豆の踊子・泣虫小僧	川端康成・林芙美子	小田切進	吉行淳之介	9
12	10	1986. 7.18	走れメロス・山椒魚	太宰治・井伏鱒二	磯貝英夫	小沼丹	10
13	6	1986. 3.18	二十四の瞳	壺井栄	久保田正文	竹西寛子	11
14	11	1986. 8.20	赤いろうそくと人魚	小川未明・ <u>坪田譲治</u> ・ <u>浜田広介</u>	紅野敏郎	山室静	12
15	7	1986. 4.18	ごんぎつね・夕鶴	新美南吉・木下順二	中島国彦	宗左近	13
16	4	1986. 1.27	ビルマの豎琴	竹山道雄	保昌正夫	西尾幹二	14
17	14	1986.11.14	ちいさこべ・山月記	山本周五郎・(尾崎一雄)・(円地文子)・中島敦・(木山捷平)・(永井龍男)・(原民喜)	奥野健男	尾崎秀樹	15
18	5	1986. 2.27	しろばんば	井上靖	高橋英夫	清岡卓行	16
19	9	1986. 6.20	母六夜・おじさんの話	大岡昇平・(梅崎春生)・(伊藤整)・中野重治・(佐多稲子)	磯田光一	中野孝次	17
20	19	1987. 4.18	サアカスの馬・童謡	安岡章太郎・吉行淳之介・(遠藤周作)・(阿川弘之)・(小川国夫)・(北杜夫)	佐伯彰一	なだいなだ	18
21	18	1987. 3.15	雪三景・裸の王様	水上勉・(曾野綾子)・(辻邦生)・(竹西寛子)・開高健	進藤純孝	大岡信	19
22	20	1987. 5.23	汚点・春は夜汽車の窓から	井上ひさし・(野坂昭如)・三浦哲郎・(村上春樹)	福田宏年	野口武彦	20
23	22	1987. 7.19	現代児童文学傑作選 1	安藤美紀夫・椋鳩十・松谷みよ子・古田足日 * 1	砂田弘	宮川ひろ	
24	23	1987. 8.18	現代児童文学傑作選 2	与田準一・佐藤さとる・筒井敬介・神沢利子 * 2	滑川道夫	山下明生	
25	25	1987.12. 5	次郎物語 第1部	下村湖人	浜野卓也	三木卓	
26	26	1988. 1.20	潮騒	三島由紀夫	三好行雄	村松英子	
27	27	1988. 2.22	吾輩は猫である 上	夏目漱石	——	——	
28	28	1988. 3.21	吾輩は猫である 下	夏目漱石	小田切進	井上靖	
29	29	1988. 4.20	強力伝・高安犬物語	新田次郎・戸川幸夫・ <u>田辺聖子</u>	小松伸六	伊藤桂一	
30	30	1988. 5.23	ノンフィクション名作選	向田邦子・灰谷健次郎・河合雅雄・植村直己 * 3	井出孫六	沢木耕太郎	

* 1 他に岡本良雄・後藤竜二・岩崎京子・斎藤隆介・今西祐行・さねとうあきら・大石真

* 2 他に今江祥智・寺村輝夫・いぬいとみこ・あまんきみこ・小沢正・立原えりか・平塚武二・安房直子・長崎源之助

* 3 他に梅棹エリオ・椎名誠・黒柳徹子・小泉文夫・日高敏隆・澤地久枝

「21世紀版少年少女日本文学館」は、2009年2月23日、2月26日、3月19日、4月1日に5巻ずつ刊行